



日本文学全集 6

今昔物語

河出書房新社

日本文学全集 6 今昔物語

© 1961

編集委員

青野季吉 荒 正人
川端康成 瀬沼茂樹
中島健蔵

装 幀 著
原 弘

N D C

昭和 36 年 7 月 5 日初版印刷
昭和 36 年 7 月 10 日初版発行

定 価 290円



訳 者 福 永 武 彦
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 中 内 佐 光
印 刷 曉 印 刷 株 式 会 社
製 本 株 式 会 社 小 高 製 本 所
本文用紙 王 子 製 紙 工 業 株 式 会 社
同 納 入 株 式 会 社 大 和 屋 洋 紙 店
ク ロ ー ス 日 本 ク ロ ー ス 工 業 株 式 会 社
同 納 入 株 式 会 社 小 島 洋 紙 店

発 行 所 東 京 都 千 代 田 区 株 式 河 出 書 房 新 社
神 田 小 川 町 三 の 八 会 社
電 話 東 京 (291) 3721 ~ 7
振 替 口 座 東 京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

今昔物語

第一部 世俗

夜の町から家来が現われる話……………	五
無我夢中で賊を切り倒す話……………	七
童の機転で大の男が助かる話……………	二二
大力の僧が賊をいじめる話……………	二四
蛇と力競べをした相撲人の話……………	二六
人質の女房が力を見せる話……………	二八
田んぼの中に人形を立てる話……………	三〇
絵師が大工に敵討ちをする話……………	三二
碁の名人が女に負かされる話……………	三三

瘡を治させて逃げた女の話……………	三七
蛇の婚いだ娘を治療する話……………	三三
地神に追われた陰陽師の話……………	三三
天文博士が夢をうらなう話……………	三三
陰陽師の子供が鬼神を見る話……………	三七
死んだ妻が悪霊となる話……………	三六
朱雀門の倒れるのを当てる話……………	四〇
算道で女房どもを笑わせる話……………	四三
玄象の琵琶が鬼に取られる話……………	四四

第二部 宿 報

和歌を添えて鏡を手放す話…………… 四
前の妻が和歌を詠んで死ぬ話…………… 四
無学の男がわからぬ歌に怒る話…………… 五
東国の武士が一騎打ちをする話…………… 五

親の敵と知って討ちとめる話…………… 五
大盜袴垂にねらわれる話…………… 六
約束を信じて人質を許す話…………… 六
親子で馬盗人を追いかける話…………… 六

鷲に赤んぼを取られる話…………… 七
燕とまじわって子ができる話…………… 七
洪水に流されて木にすがる話…………… 七
危うく密男とまちがえられる話…………… 八
生埋にされた子が助かる話…………… 八
生贄の男が猿神を退治する話…………… 九
百足と戦う蛇に加勢する話…………… 一〇
無人島に住みついた兄妹の話…………… 一三

犬の鼻から蚕の糸が出る話…………… 一四
雨宿りをして金持ちになる話…………… 一六
芋粥を食って飽きる話…………… 一八
生まれた子の命を予言する話…………… 二五
愛欲の心を起こした修行僧の話…………… 二七
下女に打ち殺された武士の話…………… 三〇
暗闇で矢を射かけられる話…………… 三三

今
昔
物
語

「今昔物語」は三十一卷から成り（ただし欠卷を含む）、その卷一から卷五までは「天竺」の部、卷六から卷十までは「震旦」の部、卷十一から卷卅一までは「本朝」の部という構成になる。全体にわたって千にあらまる短い話が収められている。これらは必ずしも漫然と排列されているのではなく、そこに一定のシステムがあり、そのためには全体を通読する必要がある、というのが訳者の本来の意見である。しかし、ここに口語訳するものは、頁数の都合からだいたい百六十篇で、全体から見ればごく一部にすぎない。そこで英断をもつて「天竺」（インド）と「震旦」（シナ）とをはぶき、「本朝」の部のみから抜萃することにした。選択は訳者の文学的嗜好にもとづいている。全体を八部に分けたのは訳者の勝手で、原典のままではないが、これは読者諸氏の便利ということを考えただからである。その説明は、各部の扉裏にある。

第一部
世
俗

「本朝」の部は卷十一から始まるが、卷廿に至る「仏法」は最後に回すことにした。そこでまず第一部として、「卷廿三本朝」「卷廿四本朝附世俗」「卷廿五本朝附世俗」の三卷から二十六篇を選んだ。「仏法」に続く卷廿一は欠卷（おそらくは宮廷に関するものと思われる）、卷廿二は藤原氏の列伝で、そのうちの一篇は第七部に訳出する。卷廿三は「世俗」とはなっていないが、前半が欠けていて第十三話から始まっているから性格が明らかでない。その後半は力持ちの話である。卷廿四は前半が各種の名人譚で、後半は和歌の靈驗を扱っている。卷廿五は新興階級である武士の話ばかり集めてある。この他に卷廿八もやはり「本朝附世俗」だが、これは第四部としてまとめた。「世俗」というのは「仏法」と並んで、「本朝」の部を大きく二分することもできる分けかただが、この第一部では世間話というくらいの意味である。

夜の町から家来が現われる話

今は昔のこと、宇治殿が関白として世に時めいていられたころのことである。三井寺の明尊僧正が、護持僧として夜も御殿に勤めていたが、殿はいっこうに燈明の火を入れるようお命じにならなかった。というのは、しばらくしてから僧正を外出させるおつもりで、そのことを誰もまだ知らなかったのである。

用向きを達して夜のうちに帰って来てもらいたいと、不意の使いの趣を僧正にお告げになると、厩のなかから、肝癖もなく物に驚くこともないおとなしい馬を選んで移し鞍(儀装)を置くよう命じて、

「供をして行かせるのだが、しかるべき者が誰かいる

か？」

とお尋ねになった。

そこに左衛門尉平の致経が伺候していたので、その旨を言上すると、

「それでよい」

とおおせになった。

そのころ、明尊僧正はまだ僧都(僧正に次ぐ位)であったから、殿のお言葉は、

「この僧都は今夜三井寺まで用足しに行き、夜のうちに此所へ戻って来るはず。大事な供ゆえ、そのつもりで参れ」

とのことで、致経がこの命令をお受けした。

この致経は、かねがね宿直所に弓と矢筒とを立て、藁(わら)沓を一足畳の下に隠し、身分の低い下人一人を用意に控えさせていた。それを見る人は、いざというときの用心がこんなことでは何と心細い侍(さむらい)だろうと思っていた。致経はさっそく命令をお受けすると、袴(はかま)のくくりを高くあげ、かねて隠しておいたものであるから、手探りに藁沓を取り出してはき、矢筒を背負って、おりしも馬を引き出したところにいち早く立ち会ったから、僧都が、

「あれは誰か？」

ときいたのに、

「致経」

と涼しい声で答えた。

「三井寺まで行こうというのに、そのなりは歩いてでも行くようではないか？ 馬はないのか？」

と僧都がきけば、

「歩いて参りましても、けっしておくれを取るようなことはありませぬ。お心おきなく、早々とお出かけください」

との返事なので、僧都はいぶかしいことだと思いながら、松明を持たせて先に立たせたが、一二町ばかり行つたところで、弓矢を帯び、黒ずくめのなりをした二人の男が、向こうから歩いて来る。僧都はそれを見て、内心恐ろしく思っていると、この二人は致経を見ると膝をついてかしまった。

「御馬を引き連れしました」

と言って引き出した馬は、夜であるから毛並みの色はわからない。はくための沓も持参しているから、致経は藁沓の上からその沓をはき、馬にまたがった。矢筒を負っ

て馬に乗った家来を二人も引き連れたので、僧都も心強く思つて道を進んで行くうち、二町ばかり行くと、また暗闇から、さきほどと同じく弓矢を帯びた黒装束の者が、二人ほど現われた。今度は致経が何ひとつ口にしないうちに、馬を引き出してまたがり、あとについて来るから、これも家来なのか、なんとも変わった仕打だ、と思つてゐるうち、また二町ばかり行くと、同様に二人現われて供についた。致経は常に無言、またこの家来たちも一言も口をきかない。こうして二町ばかり行くごとに、二人ずつ供についたので、賀茂の河原を出た時には三十人あまりになっていた。僧都は、ふしぎな仕業だと思ひながら、無事に三井寺に到着した。

宇治殿からの用向きを申し渡して、その夜のうちに直ちに帰路についたが、僧都の前とうしろに、この家来たちが僧都を包みこむようにして行くから、心丈夫に覚える。河原に着くまでは、この者たちはそっくりいっしょに來たが、京の町にはいつてからは、致経が何ひとつ下知もしないのに、往きに現われた場所二人ずつ減つてゆき、御殿まであと一町というところでは、最初に出て來た家来二人だけが残っていた。致経は初めに馬に乗っ

たところで馬から下り、はいていた沓も脱いで、御殿から出た時と同じかっこうになって歩き出したから、この二人の者も、その沓を持ち、馬を引いて、闇の中に消え失せてしまった。そこで致経も、初めどおりに身分の低い下人一人を供に連れて、藁沓をはいて、御門の中にはいった。

僧都はこれを見て、馬も家来も、かねてこのように準備しておいたその手まわしのよさにすっかり驚いて、このことを殿に申し上げようと思ひながら、御前に伺候した。

殿は僧都の帰りを待ちかねて、まだ御寝なさっていられたから、僧都は用向きの話を申し終わってから、

「致経には驚き入りました」

と今夜のことを包まず申して、

「あのような家来を持つとは、したたかな侍でございませうな」

と感じ入ったが、内心では、殿もこれをお聞きになったら、もっと詳しいお話をおききになるだろう、と予期していたのに、かくべつそのようなお尋ねもないので、僧

都は拍子抜けがした。

この致経は、平の致頼という武士の子である。勇猛心を持ち、普通用いられるのよりは一段と大きな矢を射たから、世の人が名づけて、大矢の左衛門尉と言った、という話である。

(巻廿三第十四話)

無我夢中で賊を切り倒す話

今は昔のこと、陸奥の国の前の国司で、橘の則光という人があった。武士の家柄ではなかったが、肝っ玉もすわっていれば、思慮も深く、力も抜群にすぐれていた。風采もりっぱで、世間の評判もよかったから、誰からも尊敬されていた。

その人がまだ若かったころ、一条天皇の御代に、衛門府の武士と五位の藏人とを兼ねて勤めていたが、ある時、宮中の宿直所から、そっと女のもとに通った。夜がしだいに更けてゆく刻限に、馬にも乗らず、太刀

を下げてだけで、召使いの童二人を供に連れて歩いて行つた。御門を出て、大宮大路を南に向けて行くうち、大内裏の囲いをした大垣のあたりに、幾人もの人が立っている様子が見えるから、どうもこれは恐ろしいことになりそうだと、思いながら通り過ぎた。八日九日ほどの月が、西の山の端に沈みかかつて、西の大垣のあたりはすっかり影になり、人がいるかどうか定かには見えな

い。と、大垣のほうから、声ばかりが、
「そこを行く奴、とまれ。此所には尊い公達がおいであそばすぞ。挨拶なしで通るつもりか？」

と呼ばわったから、則光は、曲者めとうとう出たか、と思つたものの、とっさに引き返すこともならず、大急ぎで走り過ぎようとするのを、

「さては通り過ぎるつもりか？」

と言いながら、走り寄って来る者がある。

則光が地面にうつぶすようにして、すかして見ると、弓は見えず、太刀ばかりがきらきら光っているから、飛道具は持っていないな、と少し安心し、うつぶしたまま逃げるのを、敵が追いかけて走って来るので、これは頭を打ち割られるか、と不意にさつと横手に身をかかわす

と、追いかけるほうは勢いに乗って、止まろうと思つても身体がいうことをきかない、思わず前に出て、たたらを踏むところを、やり過ごして、太刀を抜いてくらわせた。頭をたたき切つたので、相手はうつぶせに倒れた。

うまくやつた、と思つて一息ついていると、

「あいつ、どうしやがつた？」

と言いながら、またまた走りかかつて来る者がある。太刀を鞘に収めるひまもないから、脇にはさんで逃げ出すと、

「小癪な奴め」

と喚きながら走り寄って来るのが、初めの奴よりも一段と足が早そうだったから、こいつはさっきみたいになぐあいいにはいくまい、と思つて、今度は不意に、その場に石のようにしやがみこむと、夢中になつて走って来た奴が、しやがんだ自分に蹴つまずいてぱたり倒れたから、横に身をかかわして立ち上がり、倒れてまごまごしている相手の、脳天を打ち割つた。

やれやれ、これでおしまいか、と思ううち、もう一人いて、

「小癪千万、逃がすものか」

と喚きながら、見る見るうちに走り寄って来る。今度こそはやられるかもしれぬ。神さま仏さま助けたまえ、と念じて、太刀の先を鋒はなのようにまっすぐに向けて、走って来る相手に向かって不意に立ち上がったから、二人とも衝突する形となった。敵は太刀を手に持ち、切りおろそうとするが、あまりに二人のあいだが近いので、衣きぬさえ切らないうちに、則光が鋒はなのように持っている太刀に、ずぶり突き通されてしまった。その太刀を引き抜くと、相手はあお向けに倒れたから、太刀を持つほうの相手の手を、肩からずばりと切り落した。

そこで一步しりぞいて、敵がまだいるかどうか聴耳きみみを立てたけれども、音一つしなかったから、大急ぎで走って行き、待賢門たいてんもんをはいって、柱を背にして立ち、召使いの童はどうしたやらと待っていると、童が大宮大路おおいを泣きながらのぼって来るのが見つかった。そこで名を呼ぶと急いで走って来た。それを宿直所しゆくぢくしよに走らせて、着替えを取りにやらせた。今まで着ていた上の衣や指貫さしぬき（袴）などには血がついていたから、それを着替え、太刀の束つかについた血はよく洗い落したりして、童には固く口止めしたうえで、何くわぬ顔で宿直所へ帰って寝た。

夜のあいだじゅう、この事件が自分の仕業しわざだとわかったらどうしたものだろう、と心配しておちおち眠られなかったが、夜が明けるとさあたいたした評判。

「大宮大路と大炊おおいの御門との辻に、大の男が三人も、たいてとところ離れずに、切り倒されているぞ。それがあきれるばかりの太刀さばきだ」

とか、

「仲間どうしで切り合いをしたのかと思えば、同じ太刀で切られている。敵の仕業かな？ いや盗賊のしたことのようにだ」

などと口々に騒ぎ合い、殿上人てんじやうひと（宮中で昇殿を許された人々）さえも、

「さあ見に行こう」

と言って出かけて行く。則光も誘われて、初めは行かないつもりでいたが、行かないのもかえって怪しまれるものと、しぶしぶくっついて行くことにした。

そこで車にぎっしりと乗り込んで現場に着いてみると、昨晚のままで死骸にはまだ手をつけていない。そこに年のころ三十ばかり、両の頬ほから顎あごにかけて髯ひげだらけの男が、無地の袴はかまに、紺この洗いざらしの袷あせに山吹色のよくさらした単衣ひとえを着て、猪の毛皮いのししの、毛並みの逆立つよ

うにこしらえた尻鞆を太刀の鞆にかぶせ、鹿の皮の沓をはいて立っていたが、あちらこちらを指でさし示し、得意然としやべっている。何者かな、と思ううち、車の供をして来た雑色(男)どもが、

「あの男が、敵を切り殺したと申しております」

と報告したから、則光はこれはしめたと思っていると、車に乗っている殿上人たちが、

「あの男を呼んでくれ。仔細をきこう」

と呼びにやらせた。

連れてこられたその男は、頬はこけて、長い顎はひん曲り、鼻は低くて、赤茶けた髪である。目は手でこすったためか赤く血走っている。それが片膝ついて、太刀の束に手をかけてかしこまった。

「どういふ模様だったのだ？」

と問われたのに、答えて、

「昨晩の夜中のことでございますが、所用があつてこのところを通りますと、曲者が三人、『きさまは此所を通り過ぎるつもりか?』と申して、走り寄つて来て打ちかかりますので、盗賊かと存じて、相手になつてたたき伏せたのでございます。ところが今朝になつてよく見ます

と、手前を年ごろつけ狙つておりました奴ばらで、こうして敵とわかつた以上は、首を取つてくれようと思つております」

こう言つて立ち上がった。

指でさしながら、忙しげに首を振つて戦いの模様を語るから、殿上人もいちいち感心して、次から次に質問する。それに答える話しぶりが、まるで物に狂つたようである。

その時則光は、内心おかしくてならないが、この男が名乗り出たうへは、そいつのせいにする事ができて、まずは助かつたとうれしくなり、やつと顔を起こすことができた。なにしろそれまでは、これが大事になつたらどうしようかと、人知れず悩んでいたのだ。それがこの男のおかげで無事にすんだと、年老いてから子供に話して聞かせたのが、このように語り伝えられたものである。

この則光は某という人の子、今の駿河の国の前の国司季通という人の父に当たる、という話である。

童の機転で大の男が助かる話

今は昔のこと、駿河の国の前の国司で、橘の季通という人がいた。その人が若かったころ、自分の仕えていた主君の家の女房ではなく、ある身分の高い人の屋敷に住んでいた女房と、深い仲になって、こっそり忍んで通っていた。

するとその屋敷に住んでいる侍たちや、やっと六位になつたくらいの若い連中が、

「この御殿の者でもないのに、朝晩に大きな顔をして出入りするとは、とんだ奴だ。ひとつこらしめて、ひどい目に会わせてやろう」

とよりより集まつてしめし合わせた。

季通はそんなことはつゆ知らず、いつものように召使の童一人を供につれて徒歩で行き、こっそり局(女房の部屋)にはいった。童には、

「明日の朝、迎えにこい」と命じて帰らせた。

一方、目に物見せようという連中は、見張りの番を置いて、

「例の男はもう局にはいったぞ」

などと触れまわし、あっちこっちの門をしめきつて鍵を掛けてしまった。侍どもは手に手に杖を引きずり、土堀のくずれかかったあたりなどに立ち番をして見張っている。

この有様を、その局に召し使われていた女の童が見つけて、さっそく女房に注進したから、女房もびっくりして季通に教えた。季通はすでに横になっていたが、これを聞いて起き上がり、装束をつけたが、心では困ったことになったと思つてゐる。

女房は、

「御主人のところに参つてお尋ねしてみましよう」

と言つて出かけて行つたが、侍どもが共謀してすること、屋敷の御主人も見えて見ぬふりをしているのだと聞かされて、なんとも手の打ちようがない。局に帰つて来て、しくしく泣いていた。

これはひどいことになったものだ、いよいよ恥をかかされるか、と思うが、逃げる手段も見当たらないから、女の童をそつと出して、土塀のあたりにどこぞ逃げ出るすきでもないかと様子を見にやらせたが、そんな場所には侍どもが四五人ずつ、袴の裾をくくり上げ、股立ちを帯にはさんで、太刀をさげ杖を突いて立ち並んでいる。その様子を帰って来て知らせたので、季通も溜息をつくばかりである。

この季通という人は、思慮もあり、力なども強かったから、よく分別して考えた。とにかくこれもしかるべき運命であろう。ただ夜が明けるまで、こうして局にいたのでは、捕えに來た奴ばらと取っ組み合いになるだろうし、その時は、いざとなれば死ぬまでだ。それともまた、夜が明けたのちになれば、自分が誰であるかわかるだろうから、奴らも手出しはしないかもしれない。その時に従者などを呼びにやって、出て行くこともできようか。などと思案したが、ただ心配のたねは、明けがたに迎えに來るはずの童で、事情も知らずに門をたたくようなら、自分の召し使う者だと知られて、縛られてしまうかもしれない。それでは可哀そうだと、女の童を出し

て、そろそろ來はしないかと様子を見にやらせたが、この子は侍どもに口ぎたなくのしられて、その場にしゃがみこんだまま泣き出した。

そのうちに明けがたになった。するとどういふふうにうまくやったのか、自分の童が屋敷の中にはいつて來た。侍どもに氣取られて、

「どこの童だ？」

などときかれてゐる。まずい返事をしなければよいが、と思つてゐると、

「御読經の僧の童子でございます」

と涼しい声で答えている。

「それなら通れ」

というので通された。

うまいこと返事をしたな。しかし局に來て、いつも呼ぶ女の名を呼びはしないか、となおも心配していると、局には寄らずに通り返してしまつたから、季通も、これはあの子も心得ているな、それに氣のきく子供だから、うまい手立てをめぐらすかもしれないぞ、とかねがね賢い子だと承知しているので、少しばかり安心してゐると、不意に大路のほうから女の声で、